

『保元物語』の合戦場面における源為朝・源義朝の描出法

——半井本と金刀比羅宮蔵本との比較から——

城 阪 早 紀

はじめに

周知のように、『保元物語』の合戦場面は、源為朝と為朝への挑戦者による、一騎打ちの連続によって構成されている。半井本『保元物語』^①（以下、半井本）の合戦場面の構成は、次のようである。

①為朝と頼賢の先陣争い②為朝と伊藤景綱父子との戦い③為朝に対する清盛・重盛父子の対応④為朝と山田是行との戦い⑤為朝と鎌田正清との戦い⑥為朝と義朝との詞戦⑦為朝の義朝への威嚇⑧為朝と大庭兄弟との戦い⑨筑紫勢と東国勢との戦い⑩高間兄弟と金子家忠との戦い⑪筑紫勢と東国勢との戦い⑫義朝、白河北殿に火をかける。^②

うち金刀比羅宮蔵本『保元物語』^③（以下、金刀本）と共有する記事は、⑨を除く全てであり、⑨はわずか一三六字の短い記述であるに

すぎない。これらを鑑みて合戦場面の構成を比較した時、その順番・対戦相手・戦いの結果の全てにおいて、半井本・金刀本に大差はないといえよう。さらに付け加えるならば、合戦場面の文字数も、ほぼ同じである。^④にも関わらず、両諸本の描く合戦像には、大きな隔たりがあるように思われる。半井本と金刀本には、それぞれに描く〈保元の乱〉があり、それを描くために、合戦場面での人物造型を描き分けているのではないだろうか。本稿は、このような問いのもとに半井本と金刀本とを比較し、合戦場面における源為朝と源義朝の描出法を明らかにすることを目的とする。

具体的には、『保元物語』の合戦場面、すなわち中巻「白河殿へ義朝夜討ちに寄せらるる事」「白河殿攻め落す事」に焦点を置き、装束描写・詞戦^{ことばたたかい}・人物の言動や評言から人物造型の検討を試みる。

一、半井本・金刀本『保元物語』の先行論

『保元物語』について、諸本の比較研究や為朝の人物像に関して、既に多くの先行論がある。たとえば、いちはやく諸本比較を行った永積安明氏の見解がある^⑤。また、半井本に関しては、野中哲照氏の一連の論考がある^⑥。

さて、原水民樹氏は、「半井本と金刀本の為朝形象の相違を検討することにより、両異本の性格解明の一手掛りを得よう」とする。

「将門・純友とのみ為朝を対比させている半井本」は、「為朝を逆逆者の系譜上に捉えようとの意図を持」ち、「自己主張の精神に彩られた反逆者」として造型していること、また「院の権威を明確に意識する金刀本の為朝は、自己の行為に大義名分を得た」ために「己れの分を弁えた良識ある義士」として形象されると論じる^⑦。

一方で日下氏は、異なる角度から為朝像と義朝像について考察している。論旨を記すと、次の通りである。

日下氏は、半井本と金刀本を比較し、金刀本は「近衛帝崩御記事」と「崇徳院関係の記事」の増幅により、「作品の外枠」が「御国争い物語として固定化」されていること、そして為義・義朝・為朝の三者の考察から、金刀本では源氏悲劇が深化していることを述べる。

まず為朝像に関し、為義の推挙の口上において、半井本が「言葉をつくしての説明」であるのに対し、金刀本では簡略であることを指摘する。また、院御所における軍議の場について、次のように述べる。

古態本が言わば先走りして、彼の武勇歴やら一人で門を守る所
以やら、その並外れた体軀と武具すらも語った後に、衆目の中
へ彼を登場させるのに対し、金刀比羅本は彼を登場させてから、
過去のことにも遡る。調整された形態へ押し進められているこ
とは確かであろう。／結果的に失ったものは、為朝像に潜在し
ていたエネルギーであったように思われる。

次に義朝像について、昇殿の場面において金刀本は「礼儀作法を相応にわきまえた姿」や「程遠くない自らの死を予感しているかのような物言いと慎重な物腰は、知的な武將像を形作って」おり、半井本の「野蠻な行動力に満ちた武將像から、全く変貌を遂げたもの」であると述べる。そして白河北殿への放火を乞う場面では、「忠実な朝廷の臣下としての、配慮の行き届いた申し状が完成させられている」ことを指摘する。総じて、金刀本は「多様な方法を用いて、義朝の内面性の充実がはかられている」と主張する^⑧。

これら日下氏の為朝と義朝についての理解を支持したい。ただし、日下氏は合戦場面に言及しておらず、具体的な分析が必要である。

では合戦場面について、どのような考察がなされてきたのだろうか。砂川博氏は、中巻「白河殿攻め落す事」を取り上げて、金刀本の物語叙述の方向と性格を論じた。金刀本に最も近いとされる京図本・半井本・流布本との比較から、「金刀本は所与のテキストにおいて既に主題的に紡出された話柄に、表現、趣向上的の彫琢・潤色を加えることでその主題をより鮮明にする方向で成立したテキストである」と主張する。その一端として、①正清の驚嘆を語ること②正清に対する「満身に怒りを激させた為朝の凄まじい追撃」③頼賢・頼仲を迎え撃つ為朝の態度などから、金刀本では「為朝の巨大な人間像」の造型がより「生彩かつ迫力あるものに深め」られていると述べる。^⑩

また安藤淑江氏は、金刀本の義朝について、戦いが始まる前は評価が高く「後白河側の大將として凛々しく登場」するが、

義朝は「…」戦鬪のさなかに方角を気にする。この一文は、半井本では戦鬪開始時に清盛の臆病な行動を描くために用いられた一文である。同文を義朝の行動に転用することで金刀比羅本では叙述の進行につれて義朝に対する評価が変化している。「…」。

と述べる。さらに戦鬪の終盤では、「義朝方の攻撃力のなさを強調」する点、為義と戦うことを「あさまし」と非難する点から、「金刀

比羅本が義朝を非難する方向を強めている」と述べる。^⑩

ここで先行論を整理する。まず為朝像について、日下氏は、半井本に「潜在していたエネルギー」が金刀本では失われ、為朝像が「後退」していると述べる。その一方で原水氏は、半井本では「自己主張の精神に彩られた反逆者」であるが、金刀本では「己れの方を弁えた良識ある義士」として形象されると述べる。また砂川氏は、金刀本では、「為朝の巨大な人間像」の造型がより「生彩かつ迫力あるものに深め」られたと主張する。次に義朝像については、日下氏は、金刀本では、半井本の「野蛮な行動力に満ちた武將像から、全く変貌を遂げた」「知的な武將像」となり「内面性の充実がはかられている」と主張する。反して、安藤氏は金刀本の「方角を気にする」描写以降「義朝に対する評価が変化」と言う。

これらの点で合戦場面の為朝像と義朝像の理解には、議論の余地がある。次章では、為朝の人物像について改めて考察を加えたい。

二、源為朝の人物像

最初に取り上げるのは、為朝と山田是行との対決の場面である。

半井本では、合戦の途中で為朝の装束描写が挿入される。

1 (半) 八郎八白地ノ錦ノ直垂ニ、唐綾威ノ冑ノ、午時計ナルニ、
辰頭ノ甲キラメカシテ、長服輪ノ太刀ハキテ、山鳥ノ尾ノ藤

ノ皮ニテハイダル矢廿四指タル、サキニ一ハ射タリケル、残り頭高ニ負成テ、節卷ノ弓ノ拳太ニテ、八尺五寸有ガ、誠ニツヨゲナルヲ以、白蘆毛ノ馬ノ七寸ニハツンデ、太クタクマシクシテ、尾髪極テタクサンナルニ、金服輪ノ鞍置テゾ乗タリケル。(五三頁)

さらに半井本では次のように続き、為朝の名のりが記される。

2 (半) 歩セ出テ、打傾テ、「清盛方郎等ニ猿者有ト聞ク。我ハ筑紫八郎源為朝」ト名乗給ケル詞ヲ聞モ終テズ、引マウケタル矢ナレバ、ヒヤウド射ル。御曹司ノ弓手ノ草摺、ヌキ様ニシタ、カニコソ通タル。詞ニ合テ、ハシタナク射タリケリ。(五三頁)

この短い名のりは、是行に対して為朝が発した最初の言葉である。

この後すぐに物語の目線は、是行へと移る。夜の明ける前の仄暗い中のことである。是行は、この一言から声のする方角に目星をつけ、矢を放っている。半井本では、装束描写によってもたらされる〈間〉と、一瞬の駆け引き、そして視点の切り替えの妙によって、緊張感のある場面が切り取られている。

対して金刀本では、1の装束描写は記されない。かつ、3に引用した詞戦を散々に繰り返した後に是行が矢を放っている。このために、半井本にあった緊張感は失われてしまっている。

3 (金) 為朝、「こはいかに。をのれが主の清盛をだにもあははぬ敵と思ふ物を。さればこそ引退らめ。それもことはりなり。

平氏は桓武の後胤といへども、皇胤はるかに隔りたり。源氏は清和の御末、為朝迄は正しく九代也。全汝が敵対すべきにあらず。

とうく引退け。」維行、「是こそさばかりの御曹司の御定とも覚候はね。」「…平氏の郎等の射矢の、源氏の御身にたつやた、ずや、今こそ御覽せられ候はめ。」とて、只す、みにす、みける。為朝、「はしたなき奴がことばかな。其儀ならば、只一矢に射ころして捨よ。」とて、(一〇三―四頁)

続いて、大庭兄弟との対決の場面を検討する。半井本では、合戦場面の途中に、次に引用する為朝の矢の説明が挿入される。紙幅の都合で中略したが、全体は三六三字にもおよぶ。

4 (半) 征矢ヲモ、能羽ニテハ羽ザリケリ。「…」人ノ引目ト云ヨリモ、猶八寸長ク大ニ、目九サシテ、目柱ニハ角ヲゾシタリケル。カネ巻ニ漆一ハケ、夜辺指タルガ、能モ乾ヌニ、手前六寸、口六寸、ナイバ八寸、大カリマタヲネズゲテ、ミニニモ能程ハヲゾ付タリケレバ、小キ手鉾ヲ二打違ヘタルガ様ナル物也ケリ。(六一―三頁)

他方金刀本では、この為朝の矢の説明を、次の傍線部に集約する。

5 (金) 例の大鎧さしつがひ、「為朝鎮西には居住して、今迄

各をのを見知りけるこそ越度なれ。是こそ為朝がてづから自みづからはざきこしらへたる矢よ。手なみの程みよや。」として、

(一一一頁)

4 に関して、永積氏のような「長文によって合戦の進行は中断される」^⑪という批判的な読みもある。しかし、野中氏が「その特製の〈矢〉の描写がここでなされるということは、対大庭合戦こそが、為朝の最高の『晴』の場であるという認識があるということではないか」^⑫と述べるように、矢の説明を挿入することは、合戦描写の演出法の一つとして肯定的に読むべきであろう。

これら為朝のいでたちと矢の説明は、半井本・金刀本ともに、上巻「新院御所各門々固めの事付けたり軍評定の事」で既に示されている。つまり半井本では、為朝を焦点化するために、合戦描写を中断してまで装束描写や矢の説明を再度描出していると解される。次に、為朝と義朝との詞戦の場面を検討する。

6 (半) 下野守、後陣二引へテ、「此ヲ禦ハ源氏カ平氏カ。カウ

申ハ、今度ノ大將軍、下野守義朝」ト名乗ケレバ、取不レ敢、

「同氏筑紫八郎為朝」トゾ申ケル。「サテハ義朝ニハ、遥ノ弟

ゴザンナレ。何ニ、敵対シ、兄ニ向テ弓引者ハ、冥加ノ無ゾ。

落ヨ。扶ケン」ト申ケレバ、為朝、カラ／＼ト笑テ申ケルハ、

「ヤ、殿、下野殿、兄ニ向テ弓引物ノ冥加ノ無ランニハ、父ニ

向テ矢ヲ放ツ者ハ何ニ」トゾ申タル。道理ナレバ、音モセズ。

(五七〜八頁)

7 (金) 問ちかくうち寄て、「此門を固られて候は誰人ぞ。かう申は下野守源義朝、宣旨を蒙て向候はいかに。」八郎、「同氏、鎮西八郎為朝、院宣を承つて固て候。」義朝、「こはいかに。宣旨によつて向たりといはゞ、急引退候へかし。争か勅命といひ、兄に向て弓を引、冥加のつきむずるはいかに。」八郎あざ笑て、「為朝が兄に向て弓を引が冥加尽て候はゞ、いかに殿は現在の父に向て弓をひかれ候ぞ。殿は宣旨に隨て向たりとおほせられ候。為朝は院宣をうけ給て候。院宣と宣旨といづれ甲乙か候。」といふ。

(一〇八〜九頁)

この詞戦には、多くの指摘がある。半井本について、栃木孝惟氏は、物語の作者は、為朝のこの言葉につづけて《道理ナレバ、音モセズ》と書き加え、詞戦における勝利を為朝側に認めている。これはいうまでもなく、作者が為朝を勝たせることを好んだ結果で、知恵にも秀でた為朝像をさきあげることを意図したことに由来するのであろう。^⑬

と読み解く。一方で、半井本について、白崎祥一氏は、

ここでも一見すると義朝が不利なのである。しかしよく見れば、両者の理論には全く差が無いことがわかるだろう。要するに兄

弟の言い分をお互いに口にするだけなのである。¹¹⁾

と理解する。また、金刀本について、原水民樹氏は、

半井本にはみられない宣旨と院宣とがお互いにその権威を主張しあっている。院を奉じている限りに対して、一方的に逆賊の汚名を着る者ではないことを、為朝は力説するのである。¹⁵⁾

と述べる。反して、砂川博氏は次のように分析する。

金刀本は、超人的な剛勇を示す為朝に必ずしもひけをとらぬ形で為朝を描こうと努めている。¹⁶⁾

改めて本文を検討すると、半井本では、義朝の「兄に向かって矢を引く者に冥加はない」という言に対し、為朝は「父に矢を引く者に冥加があるだろうか」と切り返す。この為朝の発言の後に、地の文で「道理ナレバ、音モセズ」とあることから、栃木氏の論を支持し、為朝の勝利と理解したい。対して、金刀本では、兄弟・父子といった問題に「院宣」と「宣旨」の論理が加わる。そして詞戦の結末は、為朝が「院宣」を掲げたために、どちらに冥加があるか甲乙がつかない、という結論に至っている。砂川氏の論が、より納得のできるものと考えられよう。金刀本では、引き分けと解釈したい。

最後に、為朝の言動や為朝への評言について検討する。

8 (半) 暫シハ争ケレ共、八郎思ケルハ、「更ヌダニ、判官殿、幼少ヨリ兄弟共ヲ押ノケテ、我一人世ニ有トスルエセ物トテ、

『保元物語』の合戦場面における源為朝・源義朝の描出法

久不孝ノ身ニテ有ガ、適許リテ、親ノ前ニテ、兄ニ争イカケタランモ悪シカリナン」ト思テ、
(四四頁)

9 (半) 「……」其上、イトゞシク、為朝ヲ幼少ヨリ「兄弟皆打失イテ、我一人、世ニアラントセンズルエセ者也」トテ悪レテ、久ク不孝ノ身ニテ有ガ、マレニ許リテ上テ、親ノ免シモ無兄ヲアヘナク射殺テ、重テ不孝セラレテハ、如何アラン」ト思直テ、矢ヲ指弛ス。
(五八頁)

89の傍線部のように為朝の心内語として、父為義から「我一人、世ニアラントセンズルエセ者」と評価されているために「不孝」であるという認識が繰り返される。二重傍線部にあるように、「不孝」を重ねることを避けるため、兄と先陣を争ったり兄を射殺したりすることを避ける。そのような為朝を、半井本の編者は、

10 (半) 為朝ガ心ノ内、ヤサシウ情ヲ弁ヘタリケル。(五八頁)と評する。この「ヤサシ」の語について池田敬子氏は、「戦いの中にあつて思慮・判断が周到で、情あるものであったこと——人をむだに死に追いやるものではなかったことが評価される」と述べる。¹⁷⁾

その情けのある態度は、義朝にのみ向けられたものではなかった。11 (半) 敵ヲバ、八郎殿ハ、郎等ヲ以射セタリ、組セタリ、戦ハ共、能敵ト名乗ラヌ限ハ、矢ヲ惜テ射ザリケリ。(六〇頁)

半井本での、兄のみならず「能敵」と名乗らぬ限りは矢を惜しんで

敵を射ないという為朝の慎重な態度を見逃してはなるまい。

以上述べてきたように、半井本での為朝は、「不孝」の者としての自己認識をしており、それゆえ合戦という場であるにも関わらず、情けのある慎重な態度をとる人物として描かれている。原水氏の言うような「自己主張の精神に彩られた叛逆者」とは対極の為朝像が描かれているとはいえないだろうか。

対して、金刀本ではどうだろうか。景能を追う場面での為朝の言動を確認する。半井本と比較して金刀本では、傍線部にみるように為朝の発言がより過激であることが注目される。

12 (半) 弓ヲバ脇ニ搔夾ミ、「鎌田メ逃スナ、正清余スナ」トテ、
廿八騎、ヲメキテ懸出ケレバ、 (五五頁)

13 (金) 鎌田とつて返て、鞭・鐙を合て逃げれば、「をのれはど
こまで。あますな、もらすな。かひつかんでひつ付、頸ねち切、
八割にさいてすてん。」と、 (二〇七頁)

金刀本では、14の兄である頼賢・頼仲が援軍に駆けつけた場面でも、同様に怒りを露わにする。この場面は半井本にはない。

14 (金) 八郎是をみて怒をなして、「何共思ひたてまつらぬ兄の
殿原に前をせられつること安からね。」とて、太刀引(ぬき、
のけ甲に成て叫てかく。義朝是をよしなしと思はれけん、
引) さらして、河原をあなたこなたへかけめぐる。為朝弥怒を

なし、あの勢にかけ合、斬てはおとし、切ては捨、をめきさけ
んで馳めぐれば、二三町より内外には、敵一騎もなかりけり。

(一一六―七頁)

14の為朝の言動は、先に触れたように砂川氏が、「その超人的英雄像の一断面を照射するという物語の手法」と解釈された箇所である。しかし、半井本にみた為朝の慎重な態度と対比させた時、兄に對して怒り狂った態度を取ることが、思慮に欠けた性格であるといった負の側面をも有していると考えられまいか。

二章で述べた為朝像について整理すると、次のようになる。まず半井本は、装束描写や矢の説明を戦闘描写に挿入することで為朝を焦点化している。義朝との詞戦に勝利することから、為朝を好意的に描こうとしていることが読み取れた。自身のことを「不孝」の者と自覚しているために兄と争ったり、兄を射殺したりすることを避ける。義朝を射殺さないという判断に対しては「ヤサシ」の評語が付され、賞賛される。兄のみならず、無闇に敵を射殺することのない慎重な人物として描かれていた。対して金刀本では、半井本にあった為朝の装束描写や矢の説明を省き、義朝との詞戦では、自ら院宣を持ち出すことにより引き分けている。正清や頼賢・頼仲兄弟に對して、我を忘れて怒り狂う短慮な性格として描かれる。この金刀本の短慮な為朝像は、半井本の描く慎重な態度とは対照的である。

三、源義朝の人物像

前章では為朝像を検討したが、義朝の場合どうか。いわゆる装束描写の定型表現ではないが、義朝の姿形は次のように描かれる。

15 (半) 下野守、人ニモ勝テ居長高ニテ、マツ向内甲ノ程射ヨゲ

ニ見ヘケレバ、例ノ崎細ノ矢ヲ指食セテ、 (五八頁)

16 (金) 馬居・ことがら、群にぬけて、あっぱれ大將軍也とぞみえし。 (二〇九頁)

半井本における「居長高」とは、注釈が記すように「馬上に坐した座高の高いこと」、「マツ向内甲」は「甲に庇護されない前額部の真中」のことである。したがって、半井本で義朝が「居長高」であることは、急所を敵にさらした無防備な姿と解釈できる。対して金刀本では、「馬居」と、人の容姿・態度を意味する「ことがら」とを並列させて「群にぬけ」といると記すために、「あっぱれ大將軍」と評される義朝像を描き出している。

さらに金刀本では、「八龍」の鎧を着用していることが記される。

17 (金) 「義朝」八郎は聞しに似ずこそあばらなれ。さすがに

義朝ほどの敵をばかうは誰か射んや。こゝにて八龍にうらかか、せむ事はよもかなはじ。」と打笑ば、為朝、「さん候。一の矢におゐて、旁存する旨候で、わざとしきだひ申候。又御鎧をば

龍とはみて候。「…」とて、 (一一〇頁)

この「八龍」について、金刀本では、源氏重代の「殊秘蔵の重宝」の鎧であるが「嫡々たる」によって義朝が着用したことが、上巻「官軍勢込へ并びに主上三條殿に行幸の事」に記されている。ところが「八龍」の鎧を着ていることは、半井本では触れられない。

次に、為朝との詞戦について検討する。半井本では為朝に完敗するが、金刀本では為朝と対等に渡り合っていることは、前述した。

18 (半) 下野守、後陣ニ引ヘテ、「此ヲ禦ハ源氏カ平氏カ。カウ

申ハ、今度ノ大將軍、下野守義朝」ト名乗ケレバ、 (五七頁)

19 (金) 間ちかくうち寄て、「此門を固られて候は誰人ぞ。かう申は下野守源義朝、宣旨を蒙て向候はいかに。」 (二〇八頁)

合戦場面で名を自ら名の場面では、「先陣ニ勸テ申ケルハ」のよう²⁰に、自軍から敵方に一歩前へ出て名ののが常である。にも関わらず、半井本では、「後陣ニ引ヘテ」と義朝が逃げ腰の姿勢であることは注目すべきである。金刀本では、「間ちかくうち寄」る、とあり、義朝の態度に差があることをつけ加えておく。

最後に、義朝の言動や義朝への評言について考えたい。検討にあたり、次に紹介する野中氏の言及を看過することはできない。野中氏は、半井本の合戦部を「武士の正統たる（東国）を異端たる（筑紫）が超えてゆく」とする構図²¹として捉える。その根拠として、

東国武士が「為朝を恐れて、義朝の命に従わ」ないことや、片切小八郎大夫景重の機転などを挙げる。景重について、「古兵が、為朝の〈矢〉を防ぐために楯を奪って、自軍に『軍セヨヤ』といって自らは『引退』くことは「武士の行動として穩当ではな」く、「東国」内部の不和などの問題」であると読み解いた。²⁰

野中氏の述べるように、東国武士が義朝の命に従わない理由を、単に為朝を恐れたからと考えてよいのか。また景重の行動は穩当ではないと断言できるのか。先に述べた、義朝の逃げ腰の姿勢と関わらせつつ、検討を加えたい。

たとえば、半井本での義朝は次のように描かれる。20では、義朝が為朝に組むよう命じるも、郎党らに「その気にさせて殺し合わせるつもりだ」とささやかれる。21は、郎等らの命を軽んじるかのような手荒な発言で郎等らを鼓舞するが、22では門に向かわずに郎等らに下知をするという逃げ腰の姿勢である。23点線部でも、再び若党らに猛々しい言葉で為朝の守る門へ攻め入るように命じるが、二重傍線部にあるように、自身は扉の影に隠れたままである。そのためか、傍線部の通り郎等らは、攻め入ることなく門の脇に逃げている。これらの記事は、金刀本では、ことごとく削除されている。

20 (半) 武蔵相模ノハヤリ男ノ若者共、是ヲ聞、「スハく我等
ヲスカシ合セ殺サントシ給ハ。」「若、遠矢ニ射バ、アキ間

ニ当テ、射殺ス事ハ有共、打物^{うち}仕、組事ハ叶マジ」トサ、ヤ
ク色ヲ見テ、 (五七頁)

21 (半) 下野守、勝ニ乗テ、「責ヨく。息ナクレソ。死ネヤ
く」トゾ下知シタル。 (五九頁)

22 (半) 下野守門ニハ向ハデ、向ノ類ナル御堂ノ門ノ西ヘヨリ、
北ヘ向タルニ、方立ニ後ヲ当テ、丑寅向ニ打立テ、弓杖ツイテ
下知シケリ。 (六一頁)

23 (半) 下野守、扉ノ影ヘ打寄テ、「相模ノ若党、何ノ料ニ命ヲ
可レ惜ソ。責ヨく。鬼ヨく」ト下知セラレケレバ、我劣ジ
ト門ノワキニ進ミ寄。 (六一頁)

義朝に統率力のない理由は、21 23の点線部に記したように、郎党の命を軽んじるような発言にも関わらず、18 22 23の二重傍線部のように、自身は逃げ腰の姿勢であるからとは考えられないだろうか。次は古兵の景重が、為朝軍から楯を奪い味方に渡す場面である。

24 (半) 其中ニ景重、門ヨリ西築地ノ犬走ニゾ打テ出、長刀脇ニ
夾デ立タリケリ。カタヘノ物共、是ヲ見テ、「古兵ノナレバ、
ヲソシサヨ。軍モセデ休」トコソ申ケレ。暫シア(ツ)テ、
走り寄リテ、筑紫八郎ノ築セタル楯ヲ奪取テ、「是ヲ築テ、軍
セヨヤ、殿原」トテ、投ケ出タリ。長刀ヲ取直テ、敵打払テソ
引退ク。 (五九頁)

「古兵」と称される人物は、どのような性格として描かれるのだろうか。この「古兵」という語については、半井本では他に例を見ない。金刀本には、この景重の説話はなく、「古兵」の用例はない。また、『平家物語』に「古兵」の用例を求めると、覚一本に二例、延慶本に三例確認できる。

I (覚) 飛驒守景家はふる兵物にてありければ、このまぎれに、
宮は南都へやささだ、せ給ふらんとて、いくさはせず、其勢
五百余騎、鞭あぶみをあはせておっかけたてまつる。

(巻第四「宮御最期」三二七頁)

II (覚) 後藤兵衛実基は、ふる兵にてありければ、いくさはせず、
まづ内裏にみだれいり、手々に火をはなつて片時の煙とやきは
らふ。

(巻第十一「嗣信最期」三二二頁)

III (延) 未搦手ノ廻ラヌ先ニ、打入テ見ケレバ、元ヨリ古兵ニテ、
待ヤ受タリケム、サ知タリトテ、散々ニ射ル。

(第二末「十屋牧判官兼隆ノ夜討ニスル事」四九八頁)

IV (延) 土屋三郎ハサル古兵ニテ有ケレバ、声ヲ替テ問ケリ。

(第二末「十七土屋三郎与小二郎行合事」五四四頁)

V (延) 兼康ハ猿古兵ニテ、木曾ニ無二心ニ様ニ随タリ。

(第四「二十兼康与木曾合戦スル事」一五〇頁)

覚一本のI・IIの二例について、点線部「いくさはせず」とあるが、

『保元物語』の合戦場面における源為朝・源義朝の描出法

非難の対象にはなく、豊富な実戦経験を持ち、むやみに戦わず戦況を冷静に判断することができる者として描かれる。延慶本のIIIは相手の攻撃を事前に予測する、IVは相手に素性を知られぬように声を变える、Vは生け捕りにあっても主君への忠を忘れることなく振る舞う、といった智慧のある者として用いられる。これら「古兵」の用法を踏まえると、景重の行動は、郎等らの命を軽んじる義朝の無謀な指揮を批判し、楯をついて戦うよう勧めるものと判断される。

以上述べたように、半井本での義朝像は、郎等らを統率する力のない面が目立つたが、金刀本ではどうだろうか。鞍を貫通させるほどの威力を持つ為朝の矢を見た義朝は、次のような行動を取る。

25 (半) 下野殿、是ヲ見給テ、「八郎ガ弓勢イカメシト云共、争

猿事ハ可有。前輪ヲ射破タニモ難レ有二、主ヲ射通テ、尻輪ニ射付ベキ様ヤ可有。是ハ、八郎ガ人ヲ威トテ、計リ事ニ作テ出タルゾ。ドコナリケル凡夫境界ノ者ノ、胄武者ヲ鞍ナガラ是程射通ベキゾ。正清、一当アテテ見」ト宣ヘバ、「承ヌ」トテ、

(五四頁)

26 (金) 下野守、「何条さることの有べきぞ。八郎が義朝をおどさむとて、謀にてしつるらん。「…」をけく。八郎にをいて

は、義朝ならはすべし。」とて、うち出かけむとし給へば、鎌田次郎是を見て、「あるまじき御事にてこそ候へ。大將軍のか

くることは、千騎が百騎、百騎が十騎・五騎になる時こそ、力なき事にて候へ。」といさめられ共、〔猶〕はやりかけむとしければ、足がろども四五十人を馬の口、前後左右に取つかせて、「政清先まかり向候て、ことの躰伺候べし。」とて、

(一〇五―六頁)

半井本での義朝は、はじめから正清に為朝に組むよう命じている。ところが金刀本では、正清の制止を振り切つてまでも義朝自ら為朝に攻め寄せようとしている。さらに27でも、為朝に挑みかかる言動が繰り返されており、義朝の好戦的な性格が印象づけられる。

27 (金) 下野守、「政清が八郎とおもひて臆してぞさは覚つらん。

八郎におもては義朝一あてあてむ。いか計のことか有べき。」

とて、 (一〇八頁)

続いて、28の義朝の方違えについて検討する。これは、安藤氏の言うように、臆病さを意味する行動といえるのであろうか。

28 (金) 手綱をひかへて、「抑今日十一日、寅剋也。東はさしあたりたる塞^{ふさがり}の方也。其上朝日に向て弓ひかんこと便なかるべし。聊^{いさか}方をちかへべし。」とて、京極を下りに三條までさがりて、河原を(東へ)うちわたして、北殿をは北にみなし、東の堤をのぼりに北をさしてぞ向ひける。 (一〇八頁)

先に述べたように、半井本で方違えを行うのは清盛であった。まず

は、29の清盛の例について検討を加える。

29 (半) 清盛ハ、明レバ十一日、東フサガリ、其上、朝日ニ向テ弓引カン事、恐アリトテ、三条ヘサガリ、河原ヲ東ヘ打渡リ、東提ヲノボリニ、北ヘ指テゾ寄タリケル。 (四二頁)

半井本によると、義朝と清盛は同時に白河北殿へ向けて出発し、清盛だけが方違えを行う。この清盛の行動について、村山修一氏は、「自己兵力の消耗を少なくするため、義朝の軍を先に戦わせようとする清盛の策略²³⁾」と指摘する。また大島龍彦氏が、「慎重に状況を分析する冷静さ、深く思考する策謀家としての清盛の性向²⁴⁾」の根拠の一つとして、29の方違えを示しておられる点は重要である。

村山氏の「策略」とみる理解や、大島氏の解釈を踏まえれば、仮に清盛の方違えが、為朝と先に戦うことを避けるための行動であったとしても、それは棟梁として郎等らの命を重んじる判断であつて、臆病と非難される性格の行為であるとは考えにくい。²⁵⁾

29傍線部の「東フサガリ」について、注釈には次のようにある。

陰陽道の説に、太白神という方角神があり、太白星(金星)の異称)の精で、武運を司り、大將軍とも称した「...」。この神が東の方位にある折を東塞と称し、東の方位に向かつて事を成すことを凶とした。²⁶⁾

これによると、方違えを行うことは陰陽道の説に適った行為といえ

る。金刀本の義朝の例に立ち返って考えると、安藤氏の述べるように臆病さを意味するものではなく、陰陽道に通じた智将としての造型と解釈することができる。

最後に、保元の乱後の勲賞の場面を確認する。30の傍線部は、半井本には記されていない表現である。金刀本では、礼節を弁える動作を加え、保元の乱に勝利した義朝を「ゆ、し」と評している。

30 (金) 義朝・清盛のけ甲に成て馳まいる。兩人庭上にひざまづき畏てぞ候ひける。信西宣旨を承おほせていはく、「…」然しかを汝等程なく責おとして、国の恥をきよめ、家の名をあぐ。其功既に重し。恩祿子孫に及べし。」と仰含らる。各首を地につけ、承て罷出て、其気色誠にゆ、しくぞみえし。相隨兵共いさみの、しること斜なまならず。(一一三三〜四頁)

これらから、金刀本では、合戦前から合戦後まで一貫して義朝を「大將軍」にふさわしい人物として描いていると読み取れる。

以上、三章で述べた義朝像をまとめると、次のようになる。半井本では、詞戦において義朝は為朝に完敗していた。郎等らの命を軽んじるような粗暴な命令を郎等に下すが、義朝本人は、大將軍らしからぬ逃げ腰の姿勢で描かれる。そのため、郎等の統率力・信望はなく、「古兵」である景重に非難されている。対して金刀本では、詞戦において、為朝と互角に渡り合う。方違えを行うのは、陰陽道

にも通じた智将として描こうとしたものであった。半井本にあった逃げ腰の姿勢などは削除され、自ら為朝に戦いを挑む勇壮な人物として描かれる。さらに、源氏重代の鎧である「八龍」を着用しており、後白河方の大將軍としてふさわしく描かれていた。

おわりに

以上、半井本と金刀本の為朝と義朝の人物像に関して、装束描写・詞戦・人物の言動や評言などから、比較・検討してきた。二章・三章の末尾に付した結論を繰り返すことはしないが、要点を述べると、半井本では好意的に描かれる為朝が、金刀本では批判的に描かれることが確認できる。それと表裏をなすように、半井本では批判の対象とされていた義朝が、金刀本では合戦を通じて好意的に描かれていることが注目される。

この結果から、半井本・金刀本それぞれが、同じ〈保元の乱〉を描きながらも、別の物語として再編集しようとした意図が窺えよう。次に、これらの諸本間にみられる人物像の違いが、『保元物語』の中でどのような意味を持つのかについて論じなくてはならない。この点についての考察は、稿を改めて行いたい。

注

- ① 本文の引用は、栃木孝惟ほか校注『新日本古典文学大系43』岩波書店、一九九二年による。
- ② 野中哲照『保元物語』合戦部の構造『古典遺産』三九・一九八八年二月。
- ③ 本文の引用は、永積安明ほか校注『日本古典文学大系31』岩波書店、一九六一年による。ただし、一部表記を改めた。
- ④ 半井本・三五字×三五七行〔約〕二二四九五字。金刀本・三六字×三四一行〔約〕一二二七六字。
- ⑤ 永積安明『保元・平治物語の成立』『中世文学の成立』岩波書店、一九六三年。
- ⑥ 本論で引用した論考の他に、たとえば「為朝像の造型基調——重層論の前提として」『軍記と語り物』二四、一九八八年三月・『保元物語』合戦部の展開『軍記と語り物』二五、一九八九年三月・『保元物語』の構造——崇徳院怨霊譚と為朝渡鳥譚との関わりから』『国文学研究』一〇七、一九九二年六月などがある。
- ⑦ 原水民樹「為朝——その位置づけと形象の差異をめぐって——」『徳島大学学芸紀要』二三、一九七三年九月。なお、『保元物語』の生成と変容の場——研究史展望に立って——』(『日本文学』五八、七、二〇〇九年七月)に「金刀本の為朝は、忠・孝に厚い良識ある義士として描かれている」と、同旨の発言がある。
- ⑧ 日下力『金刀比羅本系統『保元物語』の特質——物語としての達成——』『保元物語の形成』汲古書院、一九九七年七月。
- ⑨ 砂川博『金刀比羅本保元物語の側面——「白河殿攻め落す事」の法と性格——』『北九州大学文学部紀要』三四、一九八五年一月。
- ⑩ 安藤淑江「源家の悲劇」から「義朝の罪」へ——金刀比羅本『保元物語』小考——』『名古屋芸術大学研究紀要』二九、二〇〇八年三月。また、本論で言及できなかったが、田島けい子氏は、金刀本の義朝について「負の主人公」として造型されている、と論じている。「保元物語の構想——金刀比羅宮本と半井本の落差——」『日本文学誌要』二六、一九八二年七月。
- ⑪ 注⑤に同じ。
- ⑫ 注②に同じ。
- ⑬ 栃木孝惟「半井本保元物語に関する試論——為朝の描かれた問題から——」『軍記と語り物』四、一九六六年二月。
- ⑭ 白崎祥一「辺境への回帰——為朝英雄論再考」『軍記文学の系譜と展開』一九八八年三月。また、野中哲照氏も、「儒教的倫理をより鋭く突くかのように、為朝の持ち出したのは、父子の倫理であった。語り手は、為朝の言うことが「道理ナレバ(義朝は)音モセズ」と、為朝に軍配をあげている」と述べる。『保元物語』合戦部の展開『軍記と語り物』二五、一九八九年三月。
- ⑮ 原水民樹「為朝——その位置づけと形象の差異をめぐって——」『徳島大学学芸紀要』二三、一九七三年九月。
- ⑯ 注⑨に同じ。
- ⑰ 池田敬子「やさし——軍記の武者像——」『論集日本文学・日本語』三、一九七八年六月。
- ⑱ 注⑨に同じ。
- ⑲ 注①、脚注、五七頁。
- ⑳ 注①、四六頁、伊藤景綱の名のり。同様の例として、半井本に「歩七出テ」(為朝)、金刀本に「門近くをしよせて」(正清)・「進出て申けるは」(是行)などがある。
- ㉑ 注②に同じ。

② 覚一本は、高木市之助ほか校注『日本古典文学大系323』岩波書店、一九五九～六〇年、延慶本は、北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語本文篇 上・下』勉誠社、一九九〇年による。

③ 村山修一『日本陰陽史総説』塙書房、一九八一年。

④ 大島龍彦「重仁親王の乳母子平清盛の異質性——『保元物語』を中心に——」『論集太平記の時代』新典社、二〇〇四年四月。

⑤ 方違えの場面ではないが、早川厚一氏は、清盛が為朝の門から退却する行動について、さほど非難されるものではないと述べる。『保元物語』の諸問題』『名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇』四一・二、二〇〇五年一月。「合戦記事をどう読むか——『保元物語』『平家物語』の場合——」『名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇』四二・一、二〇〇五年七月。

⑥ 注①、脚注、四二頁。

〔付記〕 本稿は、同志社大学国文学会（二〇一五年十二月）での口頭発表「合戦場面にみる『保元物語』の編集意識」に基づき、加筆修正をほどこしたものです。発表内外で、ご指導やご教示を賜りました方々に、心より御礼を申し上げます。